

[025] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10244>

出版情報：語文研究. 25, 1968-03-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

編集後記

○ 二十五号を送る。本号は、巻頭に今井源衛助教授の論文(新資料紹介)を置いて、以下四篇の平安朝文学に関する論考が並び、はからずも、平安文学小特輯の体裁となった。もっとも終りの吉川進氏の一篇は、上代の国語学的論考で異色であるところが面白い。二十二号と比較すれば、対照の妙ともいふべきか。金原理氏は平安漢詩文研究の一端、後藤昭雄氏は氏として少し趣きの変わった一篇、古賀典子氏と吉川氏の各篇は、卒業論文の中心的部分のまとめである。

○ 年度末に近づき、ご同様内外ともに気忙しい毎日である。殊に福田良輔教授がこの三月一杯で定年、退官なさるのは、研究室、編集部にとって名残り惜しいことである。この語文研究は、福田教授によって昭和二十六年創刊されたといえるからである。去る二月九日(金曜日)の最終講義には、講筵に列した方がたが遠近から百名以上も集って盛況であった。「古代日本語研究の意義」と題して、二時間近く、熱のこもった学説の精髓が講ぜられたと同時に、そのような深奥な学問を通して、人生への示唆も与えられたことは、一同深く感銘した。

○ 酷暑から酷暑へ、烈しい気象の変化は、ここ数十年稀れなことであったというが、編集の方は比較的順調に進み、支障がなかったのは、各位の御支援と御研鑽の賜であって、感謝にたえない。今後もどしどしご投稿ご協力いただいて、年二回の刊行が、三回、四回と発展することを期したいものである。本年もやがて十数名の新しい卒業生がめでたく巣立ってゆかれるが、今後のご活躍を祈り、併せて本誌への後支援をお願いするものである。(中村・春日)